
空の街

ウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の街

【Nコード】

N2549T

【作者名】

ウル

【あらすじ】

邪神ロキと雷神トールは、旅の途中で立ち寄った街で『呪われた街』の話聞く。真相を調査するために噂の街へ向かうが、そこで起きたのは 北欧神話の神々が活躍(?)するお話です。自サイトで発表している一部となります。

視界に目的地が見えてくる。

普段なら嬉しいはずのそれだが、今回ばかりは違った。

誤って不味いものを飲み込んでしまったかのように、服装と振舞い次第では女としても通じるロキの端正な顔が曇る。青というには緑がかつた碧眼で遠方の街をとらえたとき、彼は胸中に虫が這うような、嫌なものを感じた。

それは初めて訪れる場所にたいして感じる、不安や心配とは異なる。もつと良くない、恐怖にも似た感覚だった。

……あそこには、行かない方がいい。

数々の修羅場をくぐり抜けてきたことで培われた直感が、自分自身にそう訴えていた。

だが、ロキは表情を歪めても、足を止めることや引き返すことはしなかった。考えはしたが、それだけの理由で途中で引き下がることを自尊心が許さず、何より旅の同伴者が受け入れるとは思えなかった。

ロキは隣を歩く人物　トールを窺い見た。

猛々しい炎を彷彿とさせる赤い短髪に、服の上からでもわかるほどたくましい体躯。顔立ちには精悍で、茶色の瞳は生来の正義感からくる強い意思を宿している。人間からは『雷神』として崇められ、『巨人殺しのトール』との異名を持つ。

闇夜のような黒色の長髪に、体格はどちらかという細身の、『邪神』とも呼ばれるロキとは見目だけでなく性質も対照的だが、二人は不思議と共に行動することが多かった。その付き合いは、ロキがやや皮肉を込めて腐れ縁と呼ぶことがあるほどに長く、気づけばすでに相手の性格はどちらもよく把握している。

ロキの脳裏に、傍らの神を示すもう一つの異名が浮かんだ。

『人間の守護者』

その呼び名が存在するとおり、トールは困っている人間を放つてはおけない。その範囲は、人間には力が及ばないものや巨人が関わるものの他に、迷子の道案内といった小さなことにまで及び、神への祈りの有無はあまり関係ない。そういう場面に遭遇したとき、トールはとにかく手を伸ばそうとする。そして、解決のために行動し始めたら、その意思は普段と比べ物にならないほど頑なになり、簡単には解くことができない。

だから、彼の頑固さを身をもって知っているロキは無駄だと思い、胸中に落ちる影について話すことはしなかった。今回の事柄が、守護者の気を引き、その正義感に火をつける、人間絡みの内容だからだ。

ロキは目的地に目を戻した。

(呪われた街、ね……)

心の中でつぶやいたのは負に類する言葉にも関わらず、彼は好奇心がうずくのを感じた。今になって悪い予感はあるが、見据える目的地へ絶対に行きたくないわけではなかった。

昨日、耳にしたあの街に関する話の興味が、今は多少そがれたとはいえ、まだ残っていた。

事の発端となる奇妙な話を聞いたのは、少し離れたところに位置する街の酒場でのことだった。

ロキとトールが街中の散策を終えてくつろいでいると、隣の席の会話の一部が耳に引っかけた。ちょうど二人は次にどこへ行くかと旅の計画を考えていたところで、かつ、それは二人にとって興味のひかれる話でもあった。

「知ってるか？ 例の街の」

「ああ、呪われた街の話だろ？ 知ってるよ。また誰も戻ってこなかったんだってな」

「呪われたって……なんだよ、それ」

「あれが呪いじゃなかったらなんなんだ？ 来る奴も行く奴も消えちまうなんて、普通じゃないぜ。呪いとしか思えないだろう」

「まあ、たしかにな……」

「このままだと、もしかしたらこの街ごと消えちまうかもな」

「なっ、馬鹿なこと言うなよ！」

男達の会話をそこまで盗み聞いて、ロキは向かいに座るトールに「どうする？」と声は発さずに唇を動かして訊ねた。

トールは無言で小さくうなずき返した。

そのやりとりで決まった。相談をしなくても、次にやるべきことはどちらも心得ている。

人間から話の詳細を聞き出すため、ロキは早速行動を起こした。

「呪われた街、か。随分と面白そうな話だな」

人懐っこい笑みで彼が親しげに声をかけると、隣人達は怪訝な表情を作った。

「見掛けない顔だな。あんた、旅人か？」

「ああ、今日の午前中にこの街に着いた」

「あの街について聞きたいって？」

「救世主になれるかもしれない」

自信ありげにロキが返すと、男達はそれを冗談と受け取ったのか、愉快そうに笑った。

それでいい話し相手を得たと思ったのか、酒の入った人間はあっさりと警戒を解いて、『呪われた街』について話を始めた。

話題になっている街は、丘を挟んだ先にある鉱石の採掘が盛んな場所で、ロキとトールが滞在している街とは昔から交流があるそうだ。その鉱山の街に突然異変が起きた。気づいたのは今から七日前。その日を境に、向こうの街からやってくる者がいなくなったのだという。

原因は誰にもわからなかった。前日までの様子で変わったところはなく、それに繋がるような噂も耳にしたことがなかった。往來する際に使用している街道を調べたが異常はなく、それなら街で大事

が起こったのではないかと、すぐに数名を鉦山の街まで派遣したが、帰ってくる者はいなかった。何度調査を試みても、連絡は街の前でいつも途切れ、街に入った者は誰も戻ってこない。鉦山の街の詳しい様子と異変の原因は未だに不明のまま、解決策は何も見出せていないのが現状だという。

人間から話を聞いて、深く考えずとも、それが自分達にとっては無視できるものではないことをロキとトールは悟った。

二人の旅は他の神々からは娯楽と思われがちなのだが、『人間界の見回り』という名目がついている、立派な神としての仕事なのだ。……もつとも実際のところは、神としての意識をもって人間のためにと行動しているトールだけで、ロキはというとほぼ十割が好奇心からだが。

たとえ胸に秘める行動の理由は違っていても、調査をするという意見は一致して、翌朝、二人は鉦山の街へ出発した。

あの話が本当だという確信を、ロキは目的地に近づくにつれて徐々に抱き始めていた。

朝から今に至るまでずっと街道を進んできたというのに、他の人間と全くすれ違っていかないのだ。鉦山の街なら、採掘した鉦石を運び出す荷馬車や商人の姿があるものだが、それらしい人影はなく、その気配すらなかった。いつまで経っても、晴天の下の街道にいるのは、厳しい表情をしたロキとトールの二人だけだった。

無言の歩は心中の違和感に関係なく、確実に目的地との距離を縮めていった。遠くの山や空と同じく風景の一部となっていた鉦山の街は、今や強い存在感をもって目の前にあった。

街に入るまであと三步といったところで、二人は足を止めた。人間から聞いた話では、この辺りが毎回最後の連絡となる場所だ。

「何か感じるか？」

トールの問いかけに、険しい表情で眼前の街を見つめていたロキ

は、彼に顔を向けると首を横に振った。

本能的な嫌な予感を除いて、街から感じるものはなかった。外から観察する分には、建造物などに異常な点は見つからない。

ただし、相変わらず辺りに人間の姿はなく、また二人の場所から街中の物音は何も聞こえてこない。

人気のない、まるで深夜のような静寂に、トールが怪訝に街を見据える。

「誰もいないのか？」

「さてね。ここからじゃなんともいえない」

現時点で、二人には推測することしかできない。

全てをはつきりさせるには、街に入るしかない。

(……引き返すなら、今の内だな)

自分自身でも情けないと感じるほど弱気な言葉が浮かび、ロキは微かに自嘲した。

その胸中を察したのか、トールが静かな口調で彼の名前を呼んだ。

「ロキ」

「……わかってるよ」

言葉として発せられなくても、トールの言いたいことはわかっている。

ここまで来たら、前進するしかない。

二人は一度互いの意思を確認するように顔を見合わせると、問題の街に足を踏み入れた。

地面は歩きやすいように石畳が敷かれ、石造りの建物が並び、街の奥には山が聳えている。

街はその規模と街並みから、鉱石の採掘で潤っていることがわかる。

だが、そこには肝心なものが欠けていた。

ロキとトールがそれに気づくのに時間はかからなかった。

人間がいない。

街の中だというのに、人間の老若男女の誰一人として見かけない。それどころか、猫や犬などの動物さえ目に見えない。時折り、立ち止まって耳を澄ましたが、生き物が立てるような物音は聞こえてこなかった。大きな声を発しても、返事はなかった。

街は廃墟と表すには風化しておらず、今まさに建物から誰か出てきそうなほどに状態はいい。

静まり返った無人街に、二人は奇妙な孤立感と不気味さを感じたが、はつきりと異変を目の当たりには、何もせずに引き返すわけにはいかない。

ロキは何軒目かになる建物の扉を叩き、厚い板越しに内部の音や生物の気配を探ってみたが、結果は今までと変わらず、収穫はなかった。

応答のない扉をしばらく無言で見据えて、ぽつりと後ろにいる連れに提案してみる。

「なあ、無理矢理入ってみるか？」

「ロキ！」

「……冗談だよ」

破壊活動を心配するツールに、ロキは肩をすくめて建物から離れた。

街に入ってから一時間は経つというのに、異変を解決するための手がかりを未だに得ていなかった。

進展の遅さにロキは苛立っていたが、今は胸中で愚痴るだけに我慢して、別の建物に向かった。

扉の前の低い階段の一段目に足をかけたところで、不意に彼は動きを止めた。

意識の外から耳に滑り込んできたのは、風の音や連れの声とは違う、この街では初めての音だった。一度目は微かに聞こえただけで、ロキは空耳かとも思ったが、二度目のそれに確信を得た。視線を素早く辺りに走らせる。

頭上に目をやったとき、眩しい陽光を背にした黒い何かを見つけた。逆光のために輪郭をはっきりととらえることはできないが、人工物ではなく生き物に思えた。

（あれが、音の発信源か……？）

だが、ゆつくりとその正体を見定めている余裕はなかった。

注視する黒い何かが、建物の屋上で大きく動いた。

ちょうどそれが自分めがけて降ってくるのに気づき、ロキは慌て後ろに飛び退いた。

頭上からの来訪者は軽やかな身のこなしで、石畳の地面に着地した。

飛び降りてきたものの正体に、ロキは顔をしかめた。

傍に駆け寄ってきたトールがやや驚いた様子でつぶやく。

「猫……？」

艶やかな漆黒の毛におおわれた身体に、まっすぐ二人を見据えるのは金色の獣の眼。

トールの言葉のとおり、来訪者は一匹の黒猫だった。

茫然としている二人が行動を起こす前に、黒猫は一つ鳴くと、身を翻して駆け出した。

「ちっ、待て！」

「お、おい、ロキ……！」

背を向けた黒猫にロキは舌を打ち、その後を追った。一足遅れて、トールも続く。

とつさに追いかけることにしたのは、具体的な理由があったわけではない。ただ、前を走る黒い獣がここで出会った初めての生き物だったからだ。手がかりが何もない現状で、他にどうすればいいのかも決まっていない。役に立つのかわからないものでも、ひとつまみの可能性があるのなら、見逃すわけにはいかなかった。

黒猫は軽快な足取りで、石畳の上を飛ぶように駆けて行く。振り切られてしまうような速さではないが、なかなか手の届く範囲までには追いつかない。

焦れつたくなる、つかず離れずの距離に、ロキが魔術を使うことを考えたとき、黒猫が路地の角を曲がった。

二人も躊躇いなく、同じ所で道を折れる。

だが、程なくして足を止めざるおえなくなった。

眼前の光景にロキはやや目を見開いて、疑問を口にする。

「……どこに行った？」

追っていた獣の姿が、前方に続く道のどこにも見当たらなかった。慌てて念入りに周囲を見回す。

そこは今まで通ってきた路地とたいして変わらなかった。道端の双方には身長よりも高い石造りの建物が並び、その窓や扉は外部の何者も拒絶するように閉じられている。壁面に猫が通り抜けできるような穴は見当たらず、隠れられそうな物の類もない。脇道があるのかと少し前進してみたが、どうやらしばらくは一本道のようにだった。

(……おかしい)

間違いなく黒猫がこの道に入ったのを目にしたロキは、見つからないことに違和感を抱かずにはいらなかった。

追跡していた黒猫との距離を考えると、角を一つ曲がっただけで見失うのは妙だ。

「上に逃げたんじゃないか」

確かに身軽な猫ならあり得るかもしれない。

だが、トールの推測にロキは素直にうなずけなかった。

手近の建物を見上げる。

建造物の途切れた先に見えるのは、空の青と白く輝く太陽で探す黒は映らない。

「ロキ」

どこか気遣うように、トールが名前を呼んだ。言外に、黒猫の捜索を諦めることを提案している。

ロキは釈然としない気分で、短く嘆息した。

悔しいが、諦めるしかないのだろう。

黒猫の行方の見当なんてつかない自分達に打つ手はない。また運良く出会えるのを待つしかない。

(くそっ、せつかく見つけた手がかりだったかもしれないのに……)
そう思った途端、ロキの胸中がざわめいた。

(見つけた、手がかり……?)

ふと彼の頭に、目の前に現れた黒猫に対する別の見方が浮かんできた。

その仮定を考えれば考えるほど、見失ったことの悔しさが薄れ、代わりに疑念がわいてくる。

本当に自分達が見つけたのか。黒猫との遭遇は偶然ではなくて、故意ではないのか。

そうである確証は何もない。推測の域を出ないその考えは、悲観的な思い付きなのかもしれない。

だが、内側からの声を単なる思い過ぎだと簡単には払拭できなかった。現時点で、そうでない確証もないのだ。むしろ、街の異変と合わせて考えれば、警戒するに越したことはない。

ロキは念のために自分の考えを話しておこうと、後ろにいるトールに顔を向けた。

「ロキっ……！」

だが、彼の開口はトールの余裕のない声によって遮られた。

何だと、ロキが聞き返す暇はなかった。突然片腕をつかまれ、抵抗という判断を下す前に、そのまま強い力で引っ張られた。

いきなりの強引なそれに足がついていかず、ロキは倒れそうになったが、ぶつかったトールの体が支えとなったおかげで、よろめいただけで地面に転がることはなかった。

体勢を立て直すことはできたが、思考は未だに追いつかない。意識の外で硬質な音が響いたが、それが何であるのか彼にはわからなかった。

「……危なかつたな」

そのトールの台詞で、ロキの鈍くなっていた頭がようやく本来の

動きを取り戻した。

茶色の瞳の先に彼も目を向けると、石畳の上には乱雑に散らばった何かの破片があった。食器か置物か……すでにばらばらになってしまっていて、原型はわからない。

だが、ロキにとってはそんなことよりも、目の前のそれがつい先程まで自分がいた場所にあることが気にかかった。

耳に届いた硬い音色は、あれが落下して砕けた音だったのだろう。と、そこで彼の思考は、トールが自分をあの場から後退させてくれたことで大事にならなかったという事実には思い至った。

怪我をしなくて良かったという安堵や、トールへの感謝よりも先に、胸中に苛立ちが芽生えた。

ロキは腕をつかんでいるトールの手をやや乱暴に払って、落下物のそばまで歩むと、素早く碧眼を周囲に走らせた。

誰もいない。何の気配も感じない。

だが、正面にある建物の二階の窓が開いていた。

彼は建物と自分が立っていた場所との距離を考えて、そこからなら十分に可能性があるかと答えを出した。

ロキの次の行動は早かった。躊躇うことなく建物の扉に駆け寄り、取っ手をつかむ。鍵がかかっているかどうか、小さく開閉を試すと、扉は込めた力のとおり難なく動いた。

「ロキ？」

どこか不審を含んだトールの呼びかけに、ロキは顔だけで振り返ると、

「トールはそこで、誰も出てこないか見張っている」

言い放つや、彼の返事も聞かずに建物内に足を踏み入れた。

閉まっていく背後の扉の隙間から連れの戸惑う声したが、ロキは一切気にならなかった。今の彼の最優先事項は、街の異変の解決よりも、自分を狙った犯人を捕まえることに変わっていた。

建物の中はやや薄暗く、静かだった。印象は小綺麗な一般の住宅で、これといって感情を揺さぶられるような物はない。

ロキはまず、例の窓の部屋がある上の階から探ってみることにした。

周囲の様子に目と耳を立てて、建物の奥に進む。上階へ続く階段は、玄関から直進して、突き当たりを右手に折れたところにあった。飾り気のない階段は、普通の民家にあるそれと特に変わる点はない。段に足をかける前に注意深く行く先を見上げたが、生物らしき影はとらえられず、物音も聞こえてこなかった。入ってきたときと変わらず、周囲に異変は感じられない。

ロキは慎重に上の階へ歩を進めた。

何事もなく階段を上がりきると、そこは扉が一つあるだけだった。短い廊下は行き止まりで、階段は終わっている。

その扉が外から見た窓の部屋に続くものなのか、ロキは考えた。

位置からすれば、その可能性は高いだろう。そしてもしそうなら、何者かが潜んでいるかもしれない。

一層警戒を強めて、ロキは扉を開いた。

真っ先に目についたのは、開け放たれた窓だった。

やはり、ここが探していた部屋らしい。

だが、室内には誰もいなかった。それどころか、何もなかった。

生活に最低限必要な調度品さえなく、ただ四角い空間が広がっているだけだった。

空の部屋にロキは顔をしかめた。隠し扉の類いがないか、すぐに念入りに室内を調べたが、発見は何もなかった。

表情に険しさを増して、彼は他の可能性を考えた。

ここに来るまでの道中に、誰にも遭遇していない。一見した限りでは、この階に部屋は他にはなく、身を潜めることができるような場所もなかった。

とすれば、あり得る可能性は一つ。

碧眼が開けっ放しの窓をとらえる。

犯人が外に逃げ出していないかを確認するために、ロキは一方的に待機を命じたツールに声をかけようと、窓から顔を出した。

「……………!？」

考えていた言葉は、発する前に頭の中で消滅した。

とつさにロキは、自分が何かを間違えたのだと思った。だが、建物中での行動と、路地との位置関係の記憶を何度思い返しても、非を感じる部分はなかった。ならば、自分以外にあるのかと考えたが、あのツールが無断で勝手な行動を取るとは思えなかった。

だから余計に、説明のつかない眼下の光景にロキは困惑を隠せなかった。

(……………どうなっているんだ?)

覗いた窓の外、路地にいるはずのツールの姿がどこにもなかった。

窓から頭を突き出して、ロキは何度かツールの名前を呼んだが、応答はなかった。彼の目の届く範囲で、赤髪の連れの姿は見当たらない。

室内に顔を戻したロキは、わずかに動揺している自身を落ち着かせて、現状の把握に努めた。

玄関からこの部屋に来るまで、時間はそんなにかかっていない。置き去りにされたとはいえ、ほんの数分でツールが怒ってどこかへ行くことはない、長い付き合いから断言できる。だとしたら、他に考えられるのは、彼の身に何かがあった。

だが、家に入ってからの短時間、外から物音らしいものは聞いていない。壁で遮られているとはいえ、何も告げずにその場を移動しなければならぬほどの出来事なら、異変が伝わってくるはずだ。ましてやツールはアース神族の中でも屈指の戦士で、易々と降伏させられるような相手ではない。

……………では、彼はどこへ行ってしまったのか。

頭に浮かんだ推測は深く考えればことごとく否定のできる要素が見つかり、得られるものはなく、ただ時間を浪費するに終わった。

疑問は振り出しに戻り、ロキはほんの一欠けらでも手がかりはな

いのかと、もう一度窓の外を見た。期待せずに連れの名前を呼び、……やはり返ってこない声と変わらない景色に舌を打って、早々に頭を引っ込めた。

どうしたものかと、彼は壁に寄りかかって次の行動を考えたが、手掛かりのない現状で考え付くのは一つしかなかった。

ここでこうして立ち止まって黙考していても、進展は望めない。頭だけではなく、足も使わなければ、解決の糸口さえ見つけられないだろう。

しかし、わかってはいても、ロキはすぐに一步を踏み出せなかった。

碧眼が部屋の出入り口をとらえる。

彼の脳裏には、己が向き合うべき二つの事柄が浮かんでいた。それらは相對するもので、同時に行うことはできない。どちらかを選択しなければならぬ。

ロキは無言で扉を見つめていたが、やがてため息を吐いて、碧眼を窓に移した。

(……トールの方を優先するか)

自分に怪我を負わせようとした犯人をこの手で捕まえてやりたいが、トールことを放っておくわけにもいかない。

優先事項をしぶしぶ変更したロキは、窓枠に足をかけると、一抹の悔しさを感じながら、窓から身を躍らせた。軽い身のこなしで石畳に危なげなく着地して、ふと彼は違和感を覚えた。

しばし地面を見つめ、はっとして先までいた建物を振り返る。

二階の部屋にある、開け放たれた窓。そこから誰かが悪意をもって、硬い何かを落としてきたのが、あの家に入った理由だった。そしてつい先程、自分はその窓から飛び降りた。

ロキの視線が再び足下に落ち、やがて周囲へと移っていく。しかし、いくら見回しても、ない。ばらばらに散って転がっていた破片が、路上のどこにも存在しない。

もっと早くに気づくべきだった真実に、ロキは舌を打った。

トールのことばかりに気がいつて、窓から覗いたときに気づけなかった間抜けな自分自身が齒がゆい。

落下物はどこへいったのか。誰かが片づけたと考えるには、あまりにも非現実的だ。

「一体、何がどうなっているんだ……っ」

解決するどころか新たに増える一方の謎に、ロキは乱暴に髪をかきあげた。

苛立ちの原因が、何も見出せない情けない己にたいしてなのか、不可思議な現状にたいしてなのか、もはや自分自身にさえわからなくなってきたている。

あの猫といい、トールといい、落下物といい、なぜこつも跡形もなく消える。

そもそも、それらは本当に存在していたのか。自分の間違い、もしくは、幻だったのではないか。

「……馬鹿げてる」

根拠のない突飛な思いつきに、ロキは失笑した。

触れてはいないが、落下物が割れる音は確かに耳にした。自分を退避させたトールは割れる瞬間を見ているはずだし、ましてや彼にいたっては、幻であるはずがない。

(……いや)

ロキの顔が微かに強ばる。

不意に思い出した出来事に、不愉快に熱くなっていた彼の思考が急速に冷めていった。

幻。

それは、そこにあるようで実際には存在しないもの。

過去に一度、ロキは実物と見間違うほどに精巧な幻に遭遇したことがある。そのときは、最後に相手から幻であることをばらされるまで、見抜くことができなかった。始終トールとともに翻弄されたその出来事は、彼にとって苦しい思い出だ。

それが唐突に脳裏を過ぎった。偶然ではない。思考とは離れた第

六感が、その可能性を訴えている。

だが、ロキは目の前に転がってきた考えにすぐには飛びつかない。ただ、ロキは目の前に転がって来た考えにすぐには飛びつかない。

なぜなら、思い出のそれは巨人の国での出来事で、ここは人間界だ。そうであるはずがない。……しかし、そうであるのなら、多くのことに説明が付く。そして、もしも謎めいた出来事が幻によつてだというのなら、この街にいるのは危険だ。

膨らんでいく己の考えに、ロキは身震いした。この街に足を踏み入れる前、街道での嫌な予感の理由が今ようやくわかった気がした。すぐにでも、ここから出た方がいい。

だが、導き出された警告に従うことはできなかった。そうしたい気持ちはあったが、行方不明のツールを放っておくわけにはいかない。置いていく、という選択肢は当然思い浮かんだが、一人で立ち去る自分を想像した途端、ロキは胸中に敗北感に似たものを覚え、出ていくのを堪えて街に留まることにした。

憂いを感じさせない、清々しさが鼻につく青空を睨み付けて、ロキが吐き捨てるようにつぶやく。

「何かあったのなら『あった』って、何もなかったのなら『なかった』って、一言でもいいから返事をしろ、馬鹿ツール……！」

応答は全く期待していなかった。だが、まるで呼応するかのよう

に、彼が言い切った直後、声が聞こえてきた。
だが、耳に届いたそれは、トールのもものではなかった。どこか間延びした響きをもつそれは言葉ではなく、聞き覚えのある動物の鳴き声だった。

考えるよりも早く、石畳を走る漆黒の獣が頭に浮かんだ。

ロキが声の発し手の姿を予想しながら右手に振り向くと、路上に想像にぴたりと当てはまる姿があった。

向けた碧眼を金色の瞳で見返してくるのは、未だ記憶に新しい黒猫だ。

ただし、その黒猫が追いかけた猫と同一であるかは否かはわから

ない。だが、ロキとしては違っていてもかまわなかった。視界にいる黒猫が幻であるのか、確認できさえすれば。以前とは違い、今度の黒猫はすぐに逃げようとはしなかった。もう追いかけてこをしたくないロキにとっては好都合だ。

「……………」

注意深く黒猫を見据えたまま、彼はそつと右手を懐にいれた。衣の中で、腰に装備している愛用の短剣よりも何回りも小さい、掌ほどの刃物の柄をつかむ。

注視する黒猫は気まぐれに尻尾を動かすだけで、駆け出す素振りはない。

機会は、きつとこの一度だけ。

ロキは右腕を引き抜く動作に合わせ、手中のそれを狙いを付けて、すばやく投げ放った。

直後、黒猫がびくりと震えた。細い四肢が安定を失い、身体が大きく傾く。抵抗も鳴き声をあげることもなく、黒猫は静かに地に倒れた。その狭い額には、小さな刃物が突き刺さっていた。

ロキは黒猫に向かって、慎重に足を踏み出した。

石畳に横たわる身体は微動にしない。開かれた眼は、歩み寄る彼に向けられてはいるが、実際は何もとらえてはない。はずだ、絶える命があるのならば。

不意に強い視線を感じて、ロキは足を止めた。黒猫との距離はまだ手の届く範囲外だが、それ以上近づくことを本能が制していた。

視線はすぐ近くから……………だが、何か違う。見られているという感覚を越えて、それは内側に入り込んでくるような、奇妙な感じがした。

ぞくりと背筋が粟立った。呼吸が乱れ始める。

(……………まずい)

体調の異変に、ロキはようやく自分が術中にはまったことに気づいた。

眼前に倒れている獣の瞳の奥から、黒猫とは別の何かの意識を感じ

じた。それは冷たい悪意を伴って、精神を侵食される危機感を覚えた。

彼はすぐに金色の眼から碧眼をそらそうとしたが、顔を動かすことは疎か、瞼を閉じることさえできなかった。

自我が少しずつ、確実に、絡め取られていくのがわかる。

どうにかしなければ、このままでは危険だ。

だが、この場を離れようとしても、足は縫い止められているかのように地面から動かせず、視界をふさぐために腕を上げることさえできない。うまく言うことを聞かない身体に、焦りと恐怖が生まれる。息苦しさも徐々に増して、思考が散り散りになりそうだ。

（落ち着け……。これも、きつと、あいつの仕業だ）

混乱しかける己を叱咤する。一度でも自分自身を見失ったら、意識は闇に埋没してしまうだろう。

制限された自由の中で、ロキは必死に魔力を高めて、重たい唇を動かした。

苦しげな息の合間から、かすれた声で、しかしはつきりと発したのは、術者の名前。

ウトガルド・ロキ。

途端、ふつと全身が軽くなった。内側からの拘束感が消え、薄れていた手足の感覚が戻り、呼吸が楽になる。

ロキは右手を握り開いて己の体の自由を確認すると、安堵の息を吐いた。間一髪のところ、術から抜け出すことができた。

だが、心の平穩は長くは続かなかった。

手から顔を上げたロキに緊張が走る。

石畳に横たわる黒猫の姿が歪んでいた。めまいでも、見間違いでもない。猫自体が、自身の造形を崩しているのだ。

漆黒の体は不規則に波打ちながら、徐々にその身に宿る色と存在感を薄れさせていき やがて、無音で跡形もなく消えた。唯一残った小さな刃物が支え失って石畳に落ち、乾いた音を立てた。

……やはり、黒猫は『生き物』ではなかった。だとしたら、今ま

での不可解な現象も、そうなのだろう。

目の前で起こった出来事に、ロキは自分の推測が正しかったことを知った。

しかし、欲していた答えを得たというのに、彼の表情は晴れなかった。先程の葛藤による疲労感が残っているからではない。

幻の消滅とほぼ同時に、背後に気配を感じた。視認しなくとも、トールではないことはすぐにわかった。

「少しは知恵がついたようだな」

耳に届いた、冷笑を含んだその声音には聞き覚えがあった。

ロキの脳裏に再び苦々しい過去が、嘲るように自分達を見下ろす壮年の男の姿がよみがえる。

険しい表情で、彼は背後を振り返った。記憶の像と視界にとらえた人物が、違うことなく重なった。

光に当たるとほのかに青く輝く銀の短髪に、雪の降る空を連想させる灰青の瞳。精悍な顔には、向けられた者の心をざわつかせる挑発的な微笑が浮かび、まとう雰囲気は氷のように鋭く冷たい。

睨み付けられているというのに眉一つ動かさない相手に、ロキは微かな苛立ちと嫌悪を覚えた。

「ウトガルド」

「久しぶりだな」

名を呼んだロキへの応答に、再会の喜びは感じられない。あるのは、聞いた者を不愉快にさせる、見下すような響きだ。

「……おまえの仕業か」

ロキが次の言葉を紡ぐまでに、一呼吸ほどの間が空いた。無意識に、言葉の選択が慎重になっていた。自分よりも背の高い相手に気圧されたからではない。一度目の邂逅で、眼前の霜の巨人はあの隻眼の主神よりも厄介な相手であることを悟ったからだ。

「街に、何をしたんだ？」

ロキは腰の短剣を意識しながら、低い声音でウトガルドに詰問する。

「人間達はどうした？」

「……………」

しかし、どの問いにも、ウトガルドは答えなかった。どこか愉快そうに、放たれる鋭い言葉を聞いているだけだ。

その態度に、自分が小馬鹿にされているように感じて、ロキの口調に苛立ちが混ざる。

「目的は何だ？ トールはどうした？……………答える、ウトガルド！」

そこでようやく沈黙を保っていたウトガルドの唇が動いた。だが、発せられたのは言葉ではなく、笑い声だった。

「何がおかしい」

「立派に神らしく振る舞っているんだな」

「っ……………！」

その一言で、ロキは渦巻く怒りを内側に抑え込んではいられなくなった。

鋼のすれる硬質な音を立てて、彼は腰の短剣を引き抜いた。無謀かもしれないという考えが脳裏を過ぎるが、激しい感情を止めるには至らなかった。

闘争心でぎらつく碧眼が、ウトガルドを見据える。

だが、相手に怯んだ様子はなく、むしろその展開を楽しんでいるのか、ロキの中の炎を煽るように、さらに侮蔑の言葉を口にする。

「やめておけ。巨人にも神にもなりきれないお前が、俺に勝てはしない」

「黙れ」

吐き捨てるようにそう言っや、ロキは地を蹴った。持ち前の俊敏さで、あっという間に相手の懐に入る。

ウトガルドが動く前に、彼は胴めがけて短剣をないだ　　が、手応えはなかった。それでも、後退はせずに攻撃を重ねた。

しかし、短剣を何度振るっても、刃は空を切るだけだった。

(……………おかしい)

刃が届くには十分な距離だということにかすりさえしないことに、

ロキは違和感を覚えた。巧みにかわされているのかと思ったが、奇妙なことに相手が動いているようには見えなかった。

ウトガルドは平然と目の前に立っている。

「どうした。まだ一撃も命中していないぞ」

困惑する彼をウトガルドがせせら笑う。

ロキはもう一度、狙いをすまして短剣を一閃させたが、これも当たらなかった。

「せっかく先手をとらせてやったというのに……つまらない奴だ」

冷やかな声に続いて空気が動くのを感じ、ロキは攻めるのをやめ、急いで飛び退いた。

「……っ」

頬にちりつと痛みが走り、彼は微かに顔をしかめた。十分に間合いをとつてから左手で頬に触れると、ぬるりとした感触がして、人差し指と中指に血が付いた。

致命傷ではないにしろ、一撃で怪我を負わされたことに、ロキは悔しさから舌を打った。

服で指に付着した血を無造作に拭い、ウトガルドを睨みつける。

「臆せずにかかってくる勇氣は認めるが、これ以上はやめておけ。

俺が本気を出していないのは、わかっているだろう？」

「うるさい」

ロキが忠告を一蹴すると、ウトガルドは芝居じみた動きで肩をすくめた。

飛び出したい衝動をロキは堪える。

本当ならすぐにでも切りかかってやりたいが、先ほどの奇妙な出来事を見無視はできない。打開策が浮かぶまで、不用意に動くのは危険だ。

ロキは短剣を握り直して、相手の一挙一動に注意を払いながら、次の一手を考える。

真っ向から討ちにいくのは無理だ。具体的に仕組みはわからないが、傷つけることができなかつたのは、ウトガルドが何かしらの力

を使っていたからだろう。それをされる前に、攻撃を加えなければならぬ。

相手の周囲に、ロキは素早く碧眼を走らせた。石畳の地面に、道の脇には石造りの建物……利用できそうなものは、ある。

「懲りない奴だな」

再び駆け出したロキに、ウトガルドが呆れたように嘲る。

ロキは相手に向かって足を進めていたが、不意に手前で進行方向を変えた。訝しむウトガルドを横目で警戒しながら、彼は左手を建物の壁に押し当てた。そして、脳裏に複数の直線で構成された凶形を描き、

「」

それを音として外側に発した。

直後、彼が触れる石の壁に大きな亀裂が走り、堅く乾いた音が辺りに響きわたった。壁は大小に砕けて路地の方へ　ちょうど、ウトガルドが立つ場所に崩落した。

落下する破片と舞い上がる土煙で、ウトガルドの姿が視界から消える。

「……………」

これで終わったと、ロキは思っではいなかった。

彼は灰色の粉塵から一瞬たりとも視線を離さず、薄くなりつつある煙の奥に揺れる人影を見とめると、その中へ躊躇うことなく飛び込んだ。

ぼやけた視界に狙う者の姿をとらえ、短剣を振る。

だが、右腕を振りきることはできなかった。

「!?!」

碧眼が驚愕に見開かれる。

短剣を握る右腕は、大きな手によって押さえ込むように強くつかまれていた。ふりほどこうしてもびくともしない。

「っ……………!」

容赦のない握力に、そのまま腕を握りつぶされるのではないかと

いう恐怖を感じて、ロキの顔が青ざめる。

抗うことはできず、感覚がなくなりつつある右手から短剣が滑り落ちる。

骨の軋む音が聞こえるような気がする。

「がっ、あ……」

堪えきれず、ロキが苦痛の声を漏らした。

だが、それは想像したとおりに腕を壊されたからではなかった。

周囲をおおっていた土煙が完全に晴れ、彼は脳を揺さぶる激痛の中で、見覚えのある刃が己の腹に突き刺さっているのを見た。

「は……っ」

生温かい鮮血が、半開きの口からこぼれ落ちる。

「残念だったな」

頭上から、ウトガルドの悦を含んだ声が聞こえてくる。

右腕が解放されたが、ロキは相手に言い返すことも反撃することもできずに、そのまま力なく膝から石畳に崩れた。辛うじて腕をつき、完全に倒れてしまうことはさけたが、四つん這いの状態から立ち上がることはできなかった。

（くそ……）

焼けるような腹部の痛みが冷静になろうとする思考をかき乱し、

口内に広がる粘ついた鉄の味が不快でたまらない。

ロキは震える右手で短剣の柄をつかんだ。

抜いてしまおうと思った。自分の得物が自分の身体に突き立てられているという現実が、ひどく屈辱的だった。

だが、引いた手は柄の表面を滑っただけで、短剣を少しも動かすことはできなかった。

視界の揺れにロキが気づいたときにはすでに遅かった。

上半身を支えている腕から力が抜ける。耐えようとする意思に反して、身体は左肩から横向きに石畳に倒れた。硬い衝撃に激痛が全身を襲い、ロキは呻き声と血を吐いた。

荒く呼吸を繰り返しながら、彼は茫然と石畳を汚す赤を見つめる。

思っていた以上に身体を動かせないことに、戦慄を覚えた。

「お前がここまでできるとは、意外だったよ」

勝者然としたその声に、ロキはぎこちない動作でウトガルドを仰ぎ見て、その姿に息を呑んだ。

崩落に巻き込まれたはずなのに、眼前の相手にはかすり傷一つ見当たらなかった。それどころか、着衣の乱れさえない。

戸惑って声を失う彼を、ウトガルドが不敵な光をはらんだ灰青の瞳で見下ろして、言葉を重ねた。

「まさか、お前にこの街の一部を破壊されるとはな。正直、驚きだ」
言い切ったその唇が冷たく歪む。

だが、ロキは向けられる嘲笑よりも、内容の方が気にかかった。

(どういう、ことだ……?)

言葉の意味をすぐに理解できなかった。

ロキが魔術を使えることは、ウトガルドは知っているはずだ。魔術で無機物を破壊することは、他者の心を操ることや怪我の治療と比べればあまり難しくはないという魔術の基本的な知識も、知らないはずがないだろう。

なのに、なぜあんな台詞が出てくるのか。

息苦しさと痛みと邪魔をされながらも、彼は疑問を生んだ言葉と、傷だらけの自分とは対照的な相手の姿を合わせて考えることで、答えを導き出した。

ロキは歯がみした。真実がもたらしたのは喜びではなく、新たな屈辱だった。

自分達に起こった、数々の奇妙な出来事に対する推測が、間違っていた。

幻は、あの黒猫や落下物だけではなかった。住人の姿がどこにもないのは、彼らに何かあったからではない。最初からそんなものは、ここには存在していなかったのだ。

この街自体が、ウトガルドが造り出した幻だった。

壁の崩壊でウトガルドが無事だったのは、当たり前のことだ。自

分自身の手によって生み出したものなのだから、どうすることも容易いはずだ。その証拠に、周りにしっかりと視線を向けてみれば、散乱しているはずの壁の残骸はどこにもなかった。

(いつから、だ……?)

自分達が惑わされたのはいつが始まりで、どこからだったのだろうか。

だが、その疑問はぼんやりと過去を回想させただけで、何の答えを得ぬまま、意識の底に沈んでいった。

「これがお前の限界か？」

「……まだ、だ」

掠れた声音でウトガルドに言い返して、ロキは腕に力を込めた。身体を起こそうとしたが、吐き出した威勢も虚しく、左肩をわずかに浮かすことができただけだった。

石畳に顔を伏せて、彼は様々な負の感情が混ざった息を吐いた。肉体が、精神が、鉛のように重い。何もしい先にあるのは闇だけだとわかっているのに、身体も思考もうまく言うことを聞かない。

「ロキ」

注意を引きつけるようにウトガルドが名前を呼んだが、ロキは返事をせず、顔さえ上げなかった。

しかし、頭上の声はかまうことなく、言葉を続けた。

「お前のことは今まで単なる半端者だと思っていたが、どうやらそうでもなかったようだ。どうだ、巨人族に戻ってくる気はないか？」

ロキは耳を疑った。元同族からは裏切り者と罵られたことや、軽蔑されたことは多々あるが、戻ってくるかと問われたのは初めてだった。

相手が何を考えているのか、理解できない。手を差し伸べるようなことをするのは、何が目的だ。

「ロキ」

今度の呼びかけに、ロキは顔を上げた。

灰青の目と視線が絡む。彼の胸中に、一つの感情がわきあがって

きた。

短い沈黙を挟んで、ロキの唇から素直な返答がこぼれた。

「ふざけるな」

憎々しげに返した、その一言が全てだった。どんな意図であろうが、ウトガルドの誘いを受ける気なんてさらさらない。

「そうか、残念だ」

拒否の答えに、ちっとも惜しくなさそうにウトガルドは言い、片腕を前に突き出した。それはもちろん、ロキを助け起こすためのものではない。

ロキは腹部の痛みすら忘れる恐怖を覚えた。今まで漠然と感じていた死が、目前に迫っている。

だが、わかっけていても彼に回避する手段はない。身体の震えを抑え込み、唇を固く閉じて、ウトガルドを睨みつけながら、自分の意識が闇に落ちるのをただ待つことしかできない。

大気が歪む。眼前の相手の手中で、何かが陽光を冷たく反射した。ウトガルドの口元の笑みが大きくなる。

自分の無力さに、ロキは心の中で悪態を吐いた。

逃れられない死を彼が覚悟した、そのとき。

「ロキ！」

聞き覚えのある大声が、彼の名を強く呼んだ。ふっと視界が陰る。頭上を仰いだウトガルドが顔をしかめ、片腕を引いて、素早く後ろへ飛び退いた。

直後、二人の間の空気が大きく揺らいだ。

上から視界に飛び込んできた人物がもつ鮮やかな赤が、ロキの目を引いた。

後ろ姿からでも、来訪者が誰であるのか、彼にはすぐにわかった。

「トール……」

碧眼を見開いてやや茫然と、行方不明だった旅の連れの名前を口にする。

……今まで一体どこにいたんだ？ 何をしていたんだ？

一度死を受け入れた反動か、傷ついて鈍くなっていたはずのロキの思考が急速に動いて、次々にトールへの疑問を生んだ。だが、現状は悠長に問いただしている場合ではない。

浮かんだ疑問はとりあえず保留にして、ロキは存命したことに胸を撫で下ろした。そして、トールを挟んで向こう側に立つウトガルドに注意を戻した。

トールもこの場の状況をわかっているのだろう。振り返ってロキを見たが、表情を悲痛に歪めただけで言葉はかけず、すぐに正面へ向き直った。その手には、柄の短い槌が握られている。

「久しぶりだな、トール。知恵よりも力なのは、相変わらずのようだ」

ウトガルドにとってはいいところを邪魔されたわけだが、言動から怒りや乱入者にたいする戸惑いは感じられなかった。

悠然とした態度の相手に、トールは敵意を隠すことなく問い返す。

「ウトガルド……この異変は、全ておまえの仕業か？」

「愚問だな。そうだと判断したからこそ、すでにミヨルニルを手に行っているのだろうか？」

「……………」

沈黙は肯定の証だ。

ロキは表情を見ずとも、トールの戦意が高まったのを感じた。

「ほう。お前も俺とやり合う気か？」

巨人殺しとの異名をとる神を目の前にしているというのに、ウトガルドに怯んだ様子はない。ロキと対峙していたときと同じく、その口調と表情には愉快を含み、状況を楽しんでいる。

相手の余裕の理由を、今のロキにはすぐに見当がついた。

この街の全てが、ウトガルド自身が造り出した幻だからだ。先の戦いでそうして見せたように、周囲にあるものは、ウトガルドの意思でどうにでもできてしまえる。

しかも、幻の影響は外側だけではなく、内側にもおよんでいるようだった。この場所では自分が考えている以上に、魔力を消耗して

しまつ。ロキがそれに気づいたのは、怪我のせいだけとは思えない、ひどい疲労を感じたからだ。魔力を使ったのは、黒猫のときと壁を破壊したときの二回だけだというのに、肉体に支障が出るほどの精神力の枯渇感に襲われた。普段ならあの程度では感じることはないそれに、彼はこの場で戦うことの不利を痛感した。

「どうした、今になって恐くなったのか？」

ウトガルドの挑発の言葉に、ミヨルニルを握る腕がぴくりと反応する。

まずい、とロキは危機感を抱いた。策もなく、無闇にウトガルドと戦うのは危険過ぎる。

「トール……っ！」

慌ててロキは、今出すことのできる声量で鋭く名前を呼んだ。言いつ切った直後、喉の絡まるような違和感に咳込む。

彼の苦しい制止がきいたのか、相手の出方に慎重になったのか、トールは動かなかった。しかし、その強靱な体軀からは煮えるような怒りが滲み出して、いつ飛び出してもおかしくはない。

(トールだけじゃ……無理だ)

放っておいても起きるだろうこの先の展開に、ロキは敗北を予感した。

トールの強さはわかっているが、悪条件ばかりのここでは勝ち目は薄い。

ロキは今の自分がどれだけ戦えるのか、自問自答した。体力も魔力も、万全とはほど遠い。真つ向から攻めに行くのは無理だろう。だが、ウトガルドの戦法については、悔しいがその身でもって知っている。トールのため……とは思いたくないが、ミヨルニルの一撃を与える、勝機を見出す隙を作ることぐらいはできるのではないか。

ロキは決意して、力なく放り出していた腕を動かした。石畳の上を引きずるようにして、腹に突き刺さっている短剣の柄を両手でつかむ。ふと手中のそれを引けば感じるだろう激痛を想像して、恐怖に身体が震えたが、手を放すことはしなかった。

一度深呼吸して、意識を両手に集中する。

「っ……！」

腕を引くと、すぐに頭がくらむほどの痛みが襲ってきた。わきあがる悲鳴を必死でかみ殺す。

一気に引き抜いてしまいたい思いに反して、見に沈んだ刃の動きは遅い。力を入れれば入れるほど苦痛は増して、身体が限界を訴える。

小さく震え始めた手に、ロキは一旦短剣を抜くのをやめた。腹部に刺さった短剣は、まだ三分の一も抜けていない。

現状への焦りと己への苛立ちを感じながら、ロキは乱れた息を整える。そして、今度こそはと気合いを入れ直し、再び短剣を引き抜こうとしたそのとき、不意に誰かに腕をつかまれた。

ぎよっとして見上げると、灰色の隻眼と視線が合った。視界にとらえたその男が、自分の見知っている人物とあまりにも酷似していて、ロキは警戒を忘れて凝視する。

見つめ返してくる灰色の瞳とは逆の右目には黒革の眼帯をして、短く切られた髪は白いが顔立ちや体格に老いは感じられない。しかし、若者という表現は相応しくなく、その見目は明らかにロキより年上で、黙っていても年長者の威厳が漂ってくる。

目の前の人物は本物なのか、そうだとしたらどうしてこんなところにいるのか。

疑念と疑問が同時に押し寄せて惑う彼に、隻眼の男が口角をわずかに上げる。

「随分と手ひどくやられたようだな、ロキ」

他者を小馬鹿にしたような表情と飄々とした口調には、嫌というほど馴染みがあった。やはりそうなのかと、ロキが相手の名前を口にしようとしたが、開口は隻眼の男の続く言葉によって遮られた。

「そんな状態で無理強いをしたら、止血する前に意識を失うぞ。ロキ、短剣から手を離せ」

「……………」

その命令に従うことにロキは一瞬だけ躊躇ったが、言われたとおりに両手を離れた。

隻眼の男の手が、彼の腕から空いた短剣の柄に移動する。

「歯を食いしばれ。間抜けに舌を噛むんじゃないぞ」

一言余計だとロキは文句を言いたかったが、口を固く閉じているために、微かに顔をしかめることしかできなかった。

合図もなしに隻眼の男が短剣を抜き始めると、身構えるロキを容赦なく激痛が襲った。身体を食いちぎられたように貫く痛みに、一瞬呼吸が止まる。視界が霞み、意識は不安定に揺れて、自我の認識さえも曖昧になっていく。そのまま暗闇に落ちていきそうになるのを、彼は寸前で踏みとどまった。

「は……」

気を失うか狂いそうな苦痛の中で、ロキは微かな温もりを感じて、小さく吐息をこぼした。混沌とした意識が徐々に秩序を取り戻して、失っていた五感がよみがえる。気づけば、気絶しかけるほどの痛みは薄れて、体内に潜る刃の嫌な感触はなくなっていた。代わりに腹部には、心地の良い温かさがあった。

「意地でも起きているとは強情な奴だ。眠ってしまったてもよかったんだぞ、ロキ」

頭上からの微笑を含んだ声を耳にして、ロキは己の身に起こったことをようやく把握した。隻眼の男の手によって腹部に刺さっていた短剣が抜かれ、その傷を魔術によって治療されたのだ。視線を動かすと、すぐ側の石畳には血で汚れた短剣が置かれ、それが刺さっていたところには片手がかざされていた。

ロキはその手の主を見上げて、やや掠れた声でその名を呼んだ。

「オーディン……」

「わかっている。礼なら言葉ではなく、後日に相応の仕事できつちりと返してもらってから、心配しなくていいぞ」

半分は本音と思われるオーディンの言葉に、ロキの表情がたちまち不愉快一色に染まる。

「……俺は、あんたに感謝なんてしてないし、礼をするつもりは、これっぽっちもない」

時折り、苦しげに声をつまらせながらもロキがそう言い返すと、つくづく可愛げのない奴だと、オーデインが芝居じみたため息を吐いた。

緊迫した場だというにも関わらず、普段と変わらない相手を食べたような言動にロキは苛つとしたが、怒るのはそこまでにしておいた。語気を少し落ち着かせて、ずっと抱いていた疑問を投げかける。「なんで、あんたがここにいるんだ？」

「わたしがここにはいけない理由があるのか？」
その理由は、ない。だが、訊ねている矛先はそこではない。ロキが求めているのは、どうしてここに来たのか、だ。彼は今回のことについて連絡していないし、トールもそうだろう。それなのに、なぜ眼前にアース神族の主神がいるのか。

だが、疑問にオーデインはそれ以上答えようとはせず、傷口から手をどけると、やや乱暴に黒髪をかき回した。突然のそれにロキはぎょつとして、すぐに片腕で頭に伸ばされている手を邪険に払った。手をはねのけられたことにオーデインは気分を害した様子はなく、むしろ、向き合う者をそうさせるような意地の悪い笑みを浮かべる。「もう大丈夫そうだな。ロキ、おまえはここでおとなしくしているんだぞ」

「おいっ！」
立ち上がるオーデインを慌ててロキが呼び止めるが、灰色の隻眼はすでに彼を見ておらず、再び向けられることはなかった。

わきあがる苛立ちと悔しさから舌を打って、ロキは身を起こしにかかった。傷口はふさがっているようだが、内側にはうずくような違和感があり、動くとき微かに痛みが走った。それでも、治療前と比べれば天と地ほどの差だ。多少もたつきながらも、今度は上半身を起こすことができた。

ロキが碧眼を周囲に向けると、倒れていたときよりも場の状況が

よくわかった。

オーデインの来訪に驚いたのは、彼だけではなかったようだ。一触即発の状態だったトールとウトガルドも、互いへの敵意をそがれて、今は注意の対象を一点に変えている。四の目の先にあるのは、もちろん隻眼の来訪者だ。

しかし、注目的であるオーデインとはいえ、緊迫した空気に顔色一つ変えずに、数種の感情が混じった視線を正面から受け止めている。

「トール、ロキのところまで下がれ」

オーデインの命令にトールはほんの少し戸惑いをみせたが、無言で言葉に従った。

「ロキ」

「平気だ」

駆け寄ってきたトールが他に何か言う前に、ロキは素つ気なく己の状態を伝えた。

端的な返事だったが彼が大事ではないことを知って、トールの不安と緊張で固まっていた表情が少し緩んだ。

「ずいぶんと大層な遊び場だな、ウトガルド」

耳に届いた声に、二人の意識が前方に引き戻される。

先までトールがいた辺りまでオーデインは足を進めて、ウトガルドと対峙していた。

「オーデイン、か。まさかアース神の長と対面できるとは、思ってもいなかったよ」

そう応えたウトガルドからは、ロキやトールと対していたときの余裕や嘲笑は薄れ、口調には警戒が漂っていた。

オーデインは特有のつかみ所ない態度で、灰青の双眸を隻眼で見据え返す。

「だろつな。それが嫌だからこそ、手間をかけてこの街を作ったのだろつ？」

「……………」

ウトガルドの顔から完全に笑みが消えた。

張り詰めた空気の中に冷えた殺気を感じ取り、ロキは思わず息を潜めたが、オーデインは言葉を紡ぐのをやめない。

「どんなことにでも予期せぬ出来事は起こるものだ。今回の場合は、招待客の力量の見誤りだな。己の力の過信と、下準備にはもう少し気を付けた方がいいぞ。……まあ、もつとも、次があるのならの話だが」

わざとらしく付け加えられた一言に、ウトガルドの双眸に鋭さが増した。

「ここで俺と一戦交えようとも?」

「おまえがその気ならば、わたしはかまわないぞ。だが、いくらここが己に有利に働く場所であろうと、わたしやツールをまとめて相手にするのは難しいと思うがな」

「本気でそう思っているのか?」

「勝敗の確率に関しては、わたしよりおまえ自身がよくわかってい
るだろう? 本人にその気がなくとも揺らぐこの場所で戦って、ど
ちらが勝つのか」

そこで、会話は途切れた。

重苦しい沈黙の中、互いに相手から視線をそらさず、微動にしない。

いつ崩れてもおかしくない危うい均衡に、見守るしかないロキは
気が気でなかった。彼は視界の隅で、石畳に放ったままの短剣の位
置をそつと確認した。本当なら手に取りたかったが、少しでも動け
ばこの場の緊張の糸が切れてしまいそうな気がして、腕を伸ばすこ
とはできなかった。

まるで時間が凝固してしまったかのように、誰も身動きせず、誰
も声を発しない。

どれだけ経ったのか。ようやく、耳が痛くなるほどの静寂を破つ
たのは、冷たく低い声音だった。

「今回はおとなしく退くことにしよう。……だが、オーデイン、そ

の甘さはいずれお前自身を破滅に追い込むぞ」

「甘い？ 寛大の間違いだろっ」

最後の最後まで飄々とした態度を崩さないオーディンを、ウトガルドは不愉快そうに一睨みすると、踵を返した。

そして、歩き出して数歩、まるで景色にとけこむようにして巨人の姿は誰の視界からも消えた。

ウトガルドが去った後、周囲の景色に異変が起こった。目の前の建造物が、端からとろけるように輪郭を失い出したのだ。原型を崩した建物は隣のそれと入り交じり、どれが何であるのか段々と見分けることができなくなっていく。

幻が消え始めているのだと、眼前の現象をロキは冷静に分析したが、様々な色が混ざり合って澱んでいく景色をずっと直視してはいられなかった。歪む視界に目眩と吐き気を感じ始め、慌てて彼は目をそらした。だが、移した先の石畳も本来の硬質さを失って、どんと柔らかくなっていく。ついに我慢できなくなって、ロキは周囲の景色を押し出すように目を閉じた。視界が一気に暗くなり、惑わすもののない黒に不快感がやわらぐ。

周囲の状況を探るために、使えない視覚の代わりに意識を他の感覚に集中させていると、無音の世界に囁くように何かか聞こえてきた。音は次第に大きく明確になり、ロキはそれが鳥のさえずりだということに気がついた。

もうそろそろ大丈夫だろうか、少し躊躇いながら彼が瞼を開ける。飛び込んできた光に一瞬目が眩んだが、何度か瞬きをすると辺りの景色がはつきりと見えるようになっていった。

そこにはもう街はなかった。石造りの建造物や石畳は跡形もなく消えて、目に映るのは宿を発ったときよりも幾分か明度を落とした青空、葉を抱く木々、短い草が生える地面、

「おはよう、ロキ」

「……………」

目が合うなり、愉快そうに彼を揶揄したオーデインの姿。

同じ現象にあったはずなのに、何事もなかったかのように平然としているその様子に、ロキは悔しさと苛立ちを覚えて、無意味だとわかりながらもオーデインを睨み付けた。しかし、予想していた以上よろくに相手をされず、灰色の隻眼は早々と彼から外された。

「……………終わったのか？」

傍らで聞こえたその声に、やや不機嫌な面持ちでロキも視線を転じると、どこかぼんやりとした様子でトールが辺りを見回していた。ロキと同じで、彼も幻が消滅する際に軽く酔ったのだろう。

「安心しろ。すでにあいつはミッドガルドの地から離れた。釘を刺したから、しばらくは何もしてこないだろう」

「そうか……………」

オーデインの言葉に、複雑な表情でトールがつぶやいた。茶色の瞳が未だ握ったままのミヨルニルに落ちる。

その言動だけでロキは、吐露されなかったトールの胸中に渦巻く感情を察した。無事に終わったことへの安堵以上に、彼は悔いている。ウトガルドと対峙して、睨み合う他に何もできなかった己にたいして。

実にトールらしい思考だとロキは多少呆れつつも、一言ぐらい何か声をかけてやろうと思った。

しかし、彼に適切な言葉が浮かぶ前に、凜とした別の声音がその場に響いた。

「何事もぶつかり合えばいいわけではない」

トールが顔を上げてオーデインを見たが、相変わらずのつかみ所のない微笑が返っただけで、言葉が重ねられることはなかった。

励ましか、慰めか、それとも忠告なのか。そもそも台詞に込められている意味自体がわかりにくい。トールのあの様子だと、何を言われたのかきつとわかってはいないだろう。もっとも、そう他者を観察しているロキもはつきりと理解できておらず、また妙に釈然と

しなかった。

あれはオーディンがつつむくトールに向けた言葉だったのだろうか。隻眼はこちらを向いてはいなかったが、ロキにはなんだか自分にも言われたような気がしてならなかった。

内心で舌を打って、ロキは居心地の悪さを紛らわすように口を開いた。

「それで」

二つの視線がロキに集まる。

彼はその中の一つに視線を合わせた。

「俺はあんたがここにいる理由をまだ聞いていないんだが……オーディン？」

「その疑問を未だに抱いていたとは、諦めの悪い奴だな」

「問いの意味をわかっていて、自分勝手に解釈をねじ曲げたのはどこの誰だ？」

すげなく応酬すると、オーディンは薄く笑った。自覚はしているが反省はしていないことが明白な仕草に、ロキが眉根を寄せる。

険しい表情の彼を前にしても、オーディンがその態度を変えることはなかった。

「少し前から、この辺りに異変を感じていた。だが、何であるのか、はつきりとかめなくてな。そんなとき、おまえ達がそこへ向かったと大鴉から連絡が入ったんだ。わたしはウトガルドが張った術のせいで踏み込めず、しばらくは注意して見守るしかなかったが、ロキ、おまえが幻に綻びを作ってくれたことで入ることが可能になった。まあ、おまえ自身にはそんな意図はなかっただろうが。ウトガルドがおまえとトールに気を取られていたおかげで、侵入することも、色々と仕掛けることも容易かったぞ」

あの巨人のように鋭利な冷たさは含んではないが、勝ち誇ったような表情を向けられると、ロキは無性に腹が立った。結果的にそうなったとはいえ、またこの主神にしてやられたと感じずにはいられない。大体にして、『色々』とは何だ。

「……あんだ、もっと早くあの場所に来れたな？」

「そんな顔をするな。おまえには感謝している」

「じゃあ、あんだの礼と俺からの礼を相殺してくれ」

「それとこれとは話が別だ」

どう別なのだろうか。

だが、訊いたところで真面目に返答されないとわかりきっているため、ロキは表情を歪めるにとどめた。

「さて、わたしはアースガルドに帰るが、おまえ達はどうする？」

「俺は……」

「俺達はミッドガルドに残る」

自分の主張を切つて疑問の視線を送ってきたトールを、ロキは横目で一瞥してから、きつぱりと返事をした。

トールからの異論はなく、オーデインは無言でうなずくと二人に背を向けた。

そのまま立ち去るのかと思つたが、一歩も足を進めないうちに、思い出したように顔だけで振り返つた。

「ああ、そうだ。二人とも、今度からはもう少し気をつけるんだぞ。今回みたいに、必ずわたしが助けてやれるとは限らないからな」

「うるさい。さっさと帰れ」

牙をむくようにロキが言ったが、オーデインは向けられた威圧を口元の笑みでことごとく受け流して、悠々と前方に向き直つた。

不意に風が起こり、微かな砂埃が宙を舞う。

ロキが瞬きを一つしたとき、目の前にすでにオーデインの姿はなかった。視界の上の方で、一羽の猛禽が空高く飛んでいくのが見えた。

完全にオーデインが見えなくなったのを確認して、ロキは精神的な疲労感から息を吐いた。すると、トールが気遣わしげに声をかけた。

「大丈夫か？ アースガルドに戻って休んだ方がよかつたんじゃないのか？」

彼の疲労はオーデインを相手にしたせいだったのだが、どうやらトールは腹部の傷が原因だと解釈したらしい。

ロキはあっけらかんと言葉を返す。

「平気だつて言っただろう。それに今戻ったら、回復したときに遠慮なく治療の代金を取り立てられるから、嫌だ」

実際は人間界にいても、仕事を押し付けられるのはあまり変わらないのだが、一緒に旅をしている現在の状態であれば、トールに面倒事のいくらかを負担させることができる。それがロキが留まることを選んだ本当の理由なのだが、本心を明かすことはせずに、代わりに保留にしていた問いを引き出した。

「ところで、俺がウトガルドと対峙してたとき、おまえはどこにいたんだ？」

訊かれたトールは、彼の示す場面がわからない様子できよとんとした顔をしたが、すぐに合点がいったようで口を開いた。

「ああ。言われたとおり以外で待っていたんだが、いつまで経つてもおまえが出てこないから、心配になって俺も建物の中に入ったんだ。二階の部屋に行つて、開いた窓から外を覗いたら、おまえが倒れていてウトガルドがいるのを見つけた」

「……なるほど」

ロキは気分の悪さが声に滲むのを抑えられなかった。その現象も十中八九、ウトガルドによるものだろう。手も足も出なかった、あときの悔しさがよみがえり、無意識に腹部に手が伸びていた。

「……もっと早く、駆けつければよかったな」

トールのつぶやきに、いつのまにか回想に落ちていたロキの意識が現実に戻される。

改めて碧眼を向けると、傍らのトールの表情は浮かなかった。

「別に、トールのせいじゃないだろう。気にする必要はない」

嘘ではなく、ロキとしては本当にそのことはどうでもよくてそう言ったのだが、視線の先の顔は曇ったままだった。

彼はため息を吐きそうになって、寸前でこらえた。向けられる思

いやりに悪意はないとわかってはいるが、今のロキにとっては面倒臭いことこの上ない。とつとその心境から離れてほしくて、話をそらすことにした。

「しかし、驚いたな」

「……何がだ？」

「トールがウトガルドに突っ込んでいかなかったことに。いつ戦いが始まるのか、冷や冷やしたよ」

自分のことは棚に上げて、ロキが大仰に肩をすくめた。

トールの表情が、苦虫を噛み潰したようなそれに変わる。

「おまえは、俺を何だと思っているんだ？」

「猪突猛進者」

遠慮なくさらりとロキが答えると、茶の瞳に微かな怒気が宿った。半眼になったトールに、彼はちっとも怯えた様子なく口の両端を笑みに歪めると、普段よりもゆっくりとした動作で立ち上がった。

だるい感じはするが、歩くことに支障はなさそうだ。服についた砂を払って、地面に落ちていた武器を拾う。小さい方は綺麗だったが、短剣は付着した血液がすでに乾ききって変色していた。こうなったら、拭うだけではとれないだろう。本当は嫌だが、近くに水場も見当たらないので、ロキは仕方なく短剣をそのまま腰の鞘に収めた。

そして、頭上を仰いで太陽の位置を確認すると、早々と歩き出した。

「あ、おい」

ロキがあっさりと目の前を横切っていくと、トールは怒りを忘れて慌てた様子をみせた。

彼の数歩先でロキは足を止めて、無言で振り返った。

「どこに行くんだ？」

「……ウトガルドに仕返しをしに」

一呼吸の沈黙の後、真剣な表情を作ってロキが答えると、トールが目を瞠った。

明らかに鵜呑みにして言葉を失った旅の連れに、ロキはため息混じりに前言を撤回する。

「冗談に決まってるだろう」

内心でいずれはと思っているが、さすがに今から行くわけがない。「ほら、とっと近くの街に行くぞ。今夜は野宿なんて絶対に嫌だからな。それと、その物騒なものをさっさとしまえ」

言い終えるなり、ロキは碧眼を進むべき道へ戻して、返事を聞かず、待たずに、歩みを再開する。

「あ、ああ」

トールは少しうろたえた様子で、聞く相手のいない返事をしながらミヨルニルを定位置に戻すと、足早に彼の後を追いかけた。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2549t/>

空の街

2011年5月14日11時41分発行